



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	語る行為と人間存在について : 私と他者との関係において
Author(s)	岡田, 雅勝
Citation	北海道大學文學部紀要, 21(2), 95-120
Issue Date	1973-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33379
Type	departmental bulletin paper
File Information	21(2)_PR95-120.pdf



語る行為と人間存在について

——私と他者との関係において——

岡
田
雅
勝

語る行為と人間存在について

——私と他者との関係において——

岡 田 雅 勝

- まえがき
- 語りの構造の分析
- 語る行為と人間存在

ま え が き

一 「人間は語る存在である」というこの疑いえない事実をわれわれはどのように了解すべきなのか。この課題にたいして、この小論は、われわれの語る行為を一体どのように了解すべきか、そしてそれを何に基礎づけるべきなのか、という問を立てることによって答えていこうとするものである。

というのも、人間を語る存在としてうけとめることは、つまるところ、人間をその本質においてことばによって規定された存在として了解しようとするからにはかならないといえるからである。したがって、ことばを問うことは、所

語る行為と人間存在について

産（エルゴン）としてのことばを問うことではなく、語る行為そのものにむかうことによって、問うもの自身、すなわち人間存在の根源を問うことであるといえよう。その意味では、フンボルトのことばに関する考察はわれわれにきわめて興味深い示唆を与えているといえよう。フンボルトによつてなされた労作には、ことばと人間の問題をめぐつて展開された、過去の幾多の根本的問題が包括されているといえるし、また、そうした問題にたいするかれの鋭い洞察がみられるのである。

本稿は、冒頭で述べた課題を遂行するために、フンボルトのことばに関する考察に焦点をあわせて論述しようとするものである。といつても、本稿のことばに関する論述の範囲はきわめて限定されている。それゆえ、本稿は、もとよりフンボルトのことばと人間に関する労作全般を考察することを意図するものではない。ことばを根源において語り（^①）に求めて、語りを「自——他——共に——話しあう」（*Mit-ein-ander-sprechen*）こととして、レーヴィットはとらえるのであるが、われわれもまた語りをそのようにうけとめて、語りを「私」と「他者」との関係において、いな、それに限定して考察しようとするものである。したがって、われわれのフンボルトにたいする考察も、ことばをめぐる、「私」と「他者」との問題に限定される。

ところで、以下の論述は二部に分けられている。一部は語りの構造の分析にむけられており、二部は、そのような構造的分析がなりたつ基盤の解明にむけられており、語る行為と人間存在との連関を問題としている。

語りの構造の分析

二 「人間は語る存在である」という事実の言明を了解するために、さしあたつて、まずわれわれの個々に語る、

「語りの構造」がどのようなものか、ということからてがけるとしよう。

「語り」の構造の分析にあたり、われわれは、「語り」というものは個々の語る主体の行為を除外してはなりたえない、ということをもつて認めておかなければならないであろう。そしてさらに個々の語る行為が原初的に「私は語る」という形式をとるということを承認するとしよう。

ところで、個々の語りがどのようなものであれ、「私は語る」という言明のうちに、すでに前提されている制約と
いうものがある。その制約について、それは私の語る行為の場としての特定の時間的・空間的諸条件であるとか、また、それゆえ、私のおかれる社会的・歴史的諸状況であるというように論ずることもできよう。しかし、私が語るためには、私は私との相互関係あるいは共同関係といったような交渉・連関をもつ、他者の存在を何よりもまずもつて前提しているということである。つまり、語りはレーヴィットのいうように「自—他—共に—話しあう」ことにほかならないゆえに、私は私と共に話しあう他者なしに何も語りえないのであり、そればかりではなく、「自—他—共に—話しあう」ことなしにそもそも語りそのものが存立しえないといえよう。

しかし、他方、「自—他—共に—話しあう」ときに、語るものの間に、すでにひとつの共通なことばが前提とされているのである。ここで、ことばの発生の問題にたちいるつもりはなく、「われわれはことばがいかに生じたのか、あるいはまたいかに生じうるかについても知るものではない、われわれのことばの事象についての歴史的な知識が始まったところで、いつもすでにひとつの完成したことばが存在している」というヤスパースの指摘を受けいれておきたいのである。⁽²⁾つまり、私が何かを語ろうとするなら、すでに私は私との共同関係を形成していることばの有機的全体というものに投げやられていて、私の語りはその全体から何かと規制をうけているといえるのである。その意味で、

語る行為と人間存在について

語りは、それが私の語りであつたとしても、私だけのものではなく、私と他者との連関全体に根差しているのである。

それゆえ、ここで私の語りに関して、ひとまずつぎのように概括しておくしよう。つまり、私の語りは、私だけのものではありえず、他者との相互関係および共同関係においてはじめてなりたつのである。また、私の発するどんなことば（それが単語であれ、文であれ）も、語りを構成していることば全体との有機的連関のうちにおかれているといえるのである。それでは、以上のように概括した問題をフンボルトにしたがつて詳細に考察していくとしよう。

三・一 この問題に関して、フンボルトはさまざまな言語の文法様式とその機能を分析していき、そのなかでとくに人称代名詞に注目を払い、そしてあらゆる言語に共通する代名詞の原型を明らかにすることによって考察していった。かれはつぎのようにいう。「あらゆることばを通して同じ代名詞型があるということは、あらゆる民族の感情にしたがつて話すことをことばの本質として前提していることを示しているものであり、話しているものは自分とむかいあつて話しあっているものをあらゆる他者と区別していることを示している」⁽³⁾。この表現のうちに語りの構造の分析にたいするフンボルトの根本的態度が示されているといえるのである。

フンボルトにとって、話すことは話すものの感情とか思想の表現なのであり、話すことがことばの本質を形成するのである。⁽⁴⁾といつても、単なる個人の感情とか思想の自己表出というのではない。語りには、それがどのような場合であっても、語るものの間の相互関係とか共同関係というものがあり、その関係によつて結ばれているものを他のあらゆるものと区別しなければならないというのがフンボルトの見解と解することができる。このような基本的なフン

ポルトの見解を了承して、つぎにかれのいう語りの構造を分析していくとしよう。

フンポルトにしたがうなら、「語り」はどんな語りであっても、問いかけ (Anrede) — 応答 (Erwiderung) という二元論的構造をもつのである。問いかけるものと応答するものとの関係を表現するのが人称代名詞である。⁽⁵⁾「私」が問いかけるものとするなら、「汝」には「私」に応答するものの位置が文法上与えられ、第三のものは「かれ」と呼ばれる。このようにみるなら、私の語りは、「私」と「汝」との間になりたつ、問いかけ—応答という構造をもっているといえよう。

こうした語りの構造の分析を通して、フンポルトは文法上表現されている人称代名詞をただたんに文法形式のうちに解消させるのではなく、人間の了解諸形式のうちに基礎づけようとするのである。人間の了解諸形式といった場合、感性的な問いかけ—応答から思考表現にいたる広義な意識作用をさすのであるが、それらをフンポルトは「問いかけ—応答」という構造で説明しようとするのである。たとえば、「私は語る」ということで、私と汝との直接的な談話とか、あるいは私のモノローグなどがあげられようが、いずれの場合においても、私の語りは、私と汝との対話 (問いかけ—応答) に基礎づけられているというのである。つまり、私の語りは対他関係—汝との対話、レーヴィットにしたがえば自—他—共に—話しあうこと——なしに、私だけではなりたちえないというのである。感情的な応答にあつては、私と汝との共感とか、怒りとか、あわれみなどの諸々の情感的な呼びかけ—応答によつて私と他者との交通了解が行われているのである。ところで、こうした私と他者との問いかけ—応答という関係は、直接に私のまゝに他者をむかいあわせることなしにも可能である。私のイマジナルな問いかけ—応答がそうであり、私のモノローグも同様である。つまり、その場合、私は私の想像のうちに他者を現前させているのであり、また、私のモノローグもモノ

語る行為と人間存在について

ローグとしてあるのも、私のうちなる「私」と「他者（汝）」との対話といえる。さらに、「考えることすら自分自身と語ることである。誰れでも考えるときは一人称で二人称である」とヤコブ・グリンが語っているのであるが、フンボルトも「話しをすることと理解することは同一の言語能力のこととなった働きである」といつて、かれは、「私は思考する、了解する、意識する」といったような私の意識作用を、私のうちなる、私と他者（汝）との対話を基礎として了解するのであって、それはつまるところ、フンボルトにしたがえば、問・い・か・け——応・答・と・い・う二元論的構造から説明されるのである。

二・二 こうした問いかけ——応答という二元論的構造は、のちになってヴァントとかワトソンなどをへて、G・H・ミードにいたって、刺戟と反応という形で詳細に展開されることになるのであるが、その詳細は省くとして、この構造についてすこしばかりたちいつて論ずるとしよう。⁽⁸⁾

私は私の話し相手である汝に何かを語りかけるときに、私は音声を紹介して汝に語りかけているが、この語りかけにおいて、私は汝に発したその音声を私自身も聞いていて、無論、その音声に汝も反応するのであるが、まずもって、私が自分の発した音声に自から反応しているのである。これが実際に行われている発話の構造といえよう。この発話において、われわれは「語りかけている私」と「語りかけられている私」とに分裂している「私」を見い出す。この場合、「語りかけられている私」は「私」との実際の対話者である「汝」と同じ位置にあるといえる。汝は汝で、また、私の問いかけに答えて、何かを語るとき、汝も自分の発する音声を聞いて自から反応している。それは汝に応答する私と同じ位置にある。このようにみえてくるなら、「私」と「汝」との異った身体的存在者間の対話を通して、対話は二重に指定されているといえるのである。つまり、私と汝との対話は現実の身体存在者間の対話であると同時に、また、こ

の身体的存在者間の対話であることを度外してもなりたつ、うちなる私と汝との対話でもある。このうちなる対話は実際に分節された音声を紹介してなされる発話——外的な対話とも名づけるとしよう——とのアナロジーにおいて措定されているといえる。分節された音声は客観性（物理的音声として）をもつて汝に私のうちなる伝達事項を伝えるのである。そのとき、その同じ音声を私自身も聞くことによって、私は私のうちに汝をもつのである。つまり、私のうちなる伝達事項は音声という客観を紹介して現実の対話者である汝に伝えられるが、私自身もそれを聞くことによってその客観は主観に帰環するといえる。しかし、このようにいえるのは、私と汝との内面がこうしたことを可能にさせる共通の体制になっており、また、物理的音声を客観として共通にうけとることを可能にさせているものがあることを前提としているからである。こうした前提となっているものを、フンボルトはハーマンおよびヘルダーからうけつぎ、内的言語形式 (Innere Sprachform) および言語の音声形式 (Lauteform der Sprache) から説明するのである。⁽⁹⁾

二・三　ところで、「私は語る」というとき、それが実際のな語り（外的な対話）であっても、また、内的な語り（うちなる対話）であっても、私は私以外のものを他者として区別している。そしてこの区別のさいに、私は他者のうちから私にむかいあつて話し相手となつてゐる汝を選んでいる（これまでこうした区別をとくにとりあげてこなかったのであるが）。したがつて、「私は語る」というときに、他者は二重の観点から「私」に対峙しているといえる。そしてこの対峙は、ブーバーの『私と汝』にみられる、「私—汝」 (Ich-Du) と「私—それ（かれ）」 (Ich-Es(Er)) といったような構造に分けられるようにおもわれる（⁽¹⁰⁾ここでは、ブーバーの思想にたちいるつもりはない。私と他者との関係がどのような構造をもっているのか、ということに限定してみた場合にである）。

まず、フンボルトは「私」以外のものを、つまり、汝を含めて他者を實在的な対象としてとらえてつぎのように

語る行為と人間存在について

いう。「私とかれとは現実的にことなつた対象である。私とかれでもつてすべてが汲みつくされている。何故なら、私とかれとは、私と私でないもの (Ich und Nicht-ich) であるからである」⁽¹²⁾。たしかに、汝を私の外的知覚の対象としてみる限り、フンボルトのいうように、汝もかれと同じようにとりあつかわれるであらう。しかし、汝というからには、すでに汝をそのような実在的な対象としてみているのではないであらう。ブーバーの汝はまさにそれ(かれ)でないという点において汝なのである。汝が汝としてあるのも、私の対話者として選ばれているからだといえるのではないか。この点に関して、フンボルトはつぎのようについて、「汝は私にむかいあわされた、かれなのである。私とかれは内的知覚と外的知覚に基因するのであるが、汝には選択の自発性がある。汝も私でないものであるが、かれのようにあらゆる存在者の領域にあるのではなく、それとは違った領域にある。つまり、共通の行為が働くことによつて、かれそのものには私でないもののほかに、また、汝でないものもあることになる。そしてかれは、たんに私と汝とのどれかに対立しているだけではなく、私と汝との両者に対立しているのである」⁽¹³⁾。このようにして、汝もひとつのかれではあるが、私にむかいあわされた、かれなのである。そして、汝は私とむかいあつて、対話という、私との相互的、共同的行為をすることによつて、はじめて汝となるのである。この点において、フンボルトのいう、「私」と「汝」との関係は、ブーバーの「私—汝」と構造上同じ関係にあるといえよう。そしてまた、私でないものを私の外的知覚の対象としてみる限り、フンボルトのいう私でないもの、つまり、かれと私との関係もブーバーの「私—かれ(それ)」と同じ関係をもつといえよう。しかし、フンボルトにおいて、「私」と「かれ」との対峙にさいして、汝の媒介というものが働いている。というのも、私はかれをかれとしてみるのも、私のうちなる私と汝との対話という構造を通してそうしているのであつて、けつして全くの単独者としての私がかれに対峙しているのではないからであ

る。その意味で、かれは、端的に私に對峙してゐるのではなく、「私—汝」に對峙してゐるといへよう。それゆゑ、ブーバー的な區別をするなら、「私—汝」、「私（私—汝）」—それ（かれ）」とでも分けられるであらう。

このようにして、フンボルトは汝のもつ特有な位置に注目を払い、汝に私と他者（かれ）とを介在させる重要な役割を荷わせてゐるのである。汝は私でないものであり、それゆゑ、他者（かれ）である。だが、それと同時に、また、かれでもないものである。このように汝はネガティヴにうけとられる。それにもかかわらず、この汝は私の對話者として、ポジティヴな役割をはたし、私にとって欠くことのできない存在である。いつさいの語りは本来的に汝なしになりたちえない。語りは、私と汝との協働的な行為といえるのであり、この協働的な行為を通して、他者（かれ）は私と汝のうちにひき入れられていくといえる。それゆゑに、人間を語る存在としてとらえるとき、あるいは他者了解の問題にむかうとき、それらへの解決の糸口を与えるのは「汝」をめぐる問題といえるのである。

二・四 それでは、「汝」のもつ特有な領域に注目して、さらに語りの構造を分析するとしよう。そのさい、フンボルトによつて探究された、双対性（Zweiheit）の概念および数意識の原初的形態をてがかりとしていきたい。⁽¹⁴⁾

フンボルトは「双数（Duala）」が従来の文法学者たちによつて文法体系からみて余分なものとみなされてきたのに反對して、双数を自然の秩序のうちから、とりわけ人間の自然というものから基礎づけようとした。そしてかれは自然および人間にみられる双対性から人間の語りの成立根拠をみようとしたのであった。つぎのものは、フンボルトにしたがえば双対性をもつものである。つまり、天と地、海と陸、昼と夜など自然の秩序に属するものや、精神と身体、男と女とか、それぞれ対をなす手足や眼や耳などの人間の自然に属するものがそうである。「双数」は、自然および人間にみられるこのような双対性に由来するというのがフンボルトの主張である。ところで、このような双対性

語る行為と人間存在について

と「語り」との関係なのであるが、フンボルトは「語り」を双対性としてうけとり、それゆえ、いまあげた、自然および人間にみられる双対性とのアナロジーにおいて「語り」をうけとっている。問いかけ―応答という「語り」の二元論的構造は、「私」と「汝」との双対の関係においてなりたっていることを示している。つまり、「私」と「汝」との双対の関係において「語り」というものになりたっている。「語り」において、「私」と「汝」とは相互関係にある。そのことは「私」と「汝」とがそれぞれ分離していることを意味する。また、相互関係を通して、「私」と「汝」は「語り」というひとつの統一された共同体において結合されているといえるのである。その意味において、「語り」は、双対の関係にある、「私」と「汝」との分裂―統一という絶えざる葛藤の状態におかれているといえるのである。数意識も、このような「私」と「汝」との双対関係から生じるというのである。たとえば、カッシーラーによると、「インドゲルマン語における「汝」という表現と「二つ」という表現は語源学的に共通の根をもつものであることが証明されている」というのである。⁽¹⁵⁾つまり、カッシーラーは「汝」をめぐった、三つの人称の区別から数詞の基本的な語を説明することができるというのである。そのことは、人類のもつ数意識は原初的に一から二へと進み、そこから三がこの仲間にはきいれられているのであり、この分離活動を通して三つの人称が分けられていると考えるべきだ、というカッシーラーの表現にあらわれている。⁽¹⁶⁾こうしたカッシーラーの表現にフンボルトのつぎの主張が対応している。「私のうちには汝もまたおのずと与えられており、ひとつの新たな対立によって第三人称が対立する。この人称は感じるものの領域が越えられているから生命のないものまで拡張されることになる」⁽¹⁷⁾。

このようにして、双対性の概念に導かれて、三つの人称の語源学的とでもいう区別にふれてきたのであるが、ここで、最も考慮されるべき問題は人間における精神と身体との双対の問題といえよう。身体的存在としての「私」と「汝」

とはそれぞれまったく別個の實在的対象として區別される。といっても、「私」、「汝」という表現自体は「語り」を前提とした表現なのであり、それゆえ、「語り」における、「私」、「汝」といったときには、第一義的に身体的存在であることが問題となるのではない。このことと関連して、「われわれ」という表現を考察してみるとしよう。「われわれ」という場合に、「私と汝」とか「私とかれ」というように、「私」と「他者」(汝、かれ)がその構成要素となっていて、けつして「私」と「私」が構成要素になりえないのである。このことは、「われわれ」への合一が、物の集合とはまったく違っていることを示している。つまり、「物の複數形は同種の要素の集積とみなされる——たとえば、人々は人と人との集合として定義しうる——に反して、「われわれ」はけつしてこのような集合として表現されない」ということである。したがって、「われわれ」というのはひとつの精神的共同体とでもいうべきものであつて、「私」と「汝」あるいは「かれ」は、その間柄を共同的關係とすることによつて、「われわれ」という共同体に包摂されているのである。といつても、この場合、何も「私」とか「汝」とかが身体的存在であることを否定するのではないし、また、各自の各自性(Jemeinigkeit)を否定するでもない。「私」と「汝」あるいは「かれ」が接統詞「…と…」(und)で結ばれるとき、物の複數形のような、物体と物体との結びつきが問題となつてゐるのではなく、まさに、「私」と「汝」あるいは「かれ」という人間と人間との間柄を共同的關係へと結びつけてゐることが問題となつてゐるといえる。といつても、この結びつきによつて、各自が身体的存在であるとか、各自性をもつものであるといふことが否定されてゐるのではない。むしろ、各自の實在的な相違があるからこそ、「われわれ」という共同体への合一の基盤が与えられてゐるとうけとるべきである、ただ、この「われわれ」という表現によつて強調されるのは、それが人間存在の特有な在り方のひとつを表現しているということである。フンボルトにしたがうなら、人間は一方に

語る行為と人間存在について

おいて身体的存在であり、他方において精神的存在である。つまり、人間は身体と精神との双対性をもっているのである。したがって、「われわれ」は、そうした双対性にもとづけられた、個と個の共同体ということになるのである。

「語り」における、「私」と「汝」も、同様に、そうした双対性に根源的にもとづけられているといえる。つまり、「私」と「汝」とはともに身体的存在であると同時に精神的存在であることによって、「語り」において相互的、共同的な行為をしているといえるのである。「語り」とは、こうした、「私と汝」によって織りなされた、ひとつの有機的全体とでもいえるのである。換言するなら、「語り」は、フォイエルバッハのいう、「私と汝との相違の實在にもとづく統一」とでも表現されよう。⁽¹⁹⁾ こうした、「私」と「汝」の統一を基盤にして、「私」に「かれ」が対峙させられる。このようにみえてくると、「われわれ」のひとつを構成する「私とかれ」も、身体的存在としては、たしかに「私」と「かれ」がその構成要素となっているといえるが、「私」のうちに、また「かれ」のうちに、うちなる「私と汝」との対話が行われていて、この「うちなる対話」を通して結びつけられた共同体といえる。

われわれ人間の行為、とりわけ意識的な行為は、つまるところ、「私と汝」との対話を基礎としているといえるのである。そしてこの対話は、私と汝との間の絶えざる活動といえるのであって、その活動において、私と汝は結合もされるし、分離もされる。しかし、この活動は絶えざる産出の活動なのであって、この活動を通して、かれもこの仲間ひき入れられていく。いうならば、この活動は有機体の活動になぞらえられる。それゆえ、対話というのは、分離、融合、統一の環としての有機的全体の中に織りなされる活動といえよう。こうしたことのフンボルトの基本的構想は、自然および人間のもつ、双対性からのアナロジーに求められるのであり、双対性の概念は、語りの構造の了解のための要石となっているのである。

以上のようにして、われわれは語りのもつ構造に分析の眼をむけてきたのであった。しかし、語ることについての究明をさしひかえてきた。語るものへの究明こそ、「人間は語る存在である」ということの解明の最も基礎となるものといえよう。語るものとは、これまでのべてきたように、私であり、汝である。しかし、フンボルトによると、各人は同時に私となり、汝となりうるのである。それゆえ、私と汝をめぐる問題は、広く人間の語る行為のうちに基礎づけられているといえる。それゆえ、われわれは、ここで、われわれの探究の課題である、「人間は語る存在である」という命題を人間の語る行為と人間の有機的活動全体とのかかわりにおいて論じなければならない場にいたったといえよう。

語る行為と人間存在

三 われわれの課題を遂行するために、「語る行為」というものが何故とりだされなければならないのか、そしてそれは一体何にもとづけられるのか、という問を立てるとしよう。

この間にむかうにあたり、ここで、さしあたって、フンボルトのことばにたいする根本命題、「ことばそのものは、けっして所産（エルゴン）ではなく、活動（エネルギー）である。ことばの真の定義は、それゆえ発生論的でありえない」を吟味していくことから始めるとしよう。

ことばをエネルギーとしてうけとるフンボルトの根本的構想は何にもとづいているのだろうか。これにたいして、まずもって、フンボルトはことばをすでに生成されてあるもの、あるいは完成されてあるものとして捉えず、絶えず生成されうるもの、創造されるものとして捉えているというように答えることができよう。しかし、そのように

語る行為と人間存在について

答えることができたとしても、フンボルトはことばがひとつの全体なる体系として存していることをなにも否むものでない。むしろ、「ことばは一度にできあがつたものとしか考えられない」とかれ自身もいつているように、ことばがひとつの全体として、あるいは体系として存在してきていることを積極的に認めているのである。したがって、ここで問題となるのは、フンボルトがことばをエネルギーとしてうけとり、エルゴンとしてみないということではなく、フンボルトがどのような意味においてことばをエネルギーとしてとらえようとしているかということである。

かのゲーテが原型植物をみいだしたのと同じ立場で、フンボルトはことばの生成および組織の神秘のヴェールの被いをはがし、その神秘を解く鍵をみいだすために、ことばを有機的生命体として捉え、その胚種となる根源的なものを探し求めていったといえるのである。つまり、フンボルトはことばを人間の有機的生命体全体の活動性のうちで捉えようとしているのであり、それゆえ、ことばの根源的な働きへのフンボルトの洞察がことばをエネルギーとして捉えるに至ったのだといえる。このようにことばを捉える根底に、「ことばは人間そのものに帰属する。ことばは人間の本質以外に源泉をもたないし、源泉を知らない」、⁽²³⁾「人間はことばによつてのみ人間である。しかし、ことばをみいだすためには、人間はすでに人間でなければならぬ」というフンボルトの根本的姿勢というものがある、ということを考慮しなければならない。換言するなら、ことばは人間の精神的諸活動の全体から考察されるという態度をフンボルトは一貫してとっているのである。この精神的活動は、直接的であれ間接的であれ、語る行為なのであって、それは具体的には、「ことばは分節された音声を思想の表現たらしめる精神の永遠に繰り返されたアルバイトである」⁽²⁵⁾というようにあらわされる。そしてフンボルトは人間の心性の最内奥から精神の必然的なエマナチオンとして

頭われてくる音声を精神の外在化に働くことばの本質的な機能としてうけとる。つまり、かれは語りというエネルギーにおいて発露ハツロウされることばを人間の内的な精神的諸状態とその内的なものの表現である音声とにおける絶えざる活動として捉えている。そしてかれは、「ことばは語ることによって形成され、語ることは思想または感情の表現である」といって、ことばの根源的な働きを語る行為に求めるのである。

こうしたことから、われわれは、ことばをエネルギーとしてうけとろうとするフンボルトの主張には、ことばを人間の精神的な諸力の活動として捉え、そしてそれを語る行為から基礎づけようとするフンボルトの基本的構想がたらぬかれているのを見るのである。ことばはエルゴンであることは否定できない。しかし、エルゴンとして限定して捉えることはことばをせまい範囲の言語学の対象としてしまい、そしてことばを死んだつくりもの(cien totes Erzeugtes)としてとりあつかうことを意味するであろう。フンボルトはけつしてことばそれ自体を考察するのではなく、ことばを人間形成の機関オルグとしてみなすのである。したがって、ことばをエネルギーとして捉えようとするフンボルトの強調点は、ことばをことばたらしめているものの根源への探究にあるのであり、それゆえ、ことばを絶えず生成するエネルギー源となっているもの、つまり、語りの根源的な行為の究明にあるといえよう。とするなら、ここで、人間とことばとの根源的な関係が問われなければならないであろうし、とりわけ、語る行為の主体である「私」が、また、私の対話者である「汝」と「私」との関係が当然問われなければならないであろう。

三・一 ことばは、徹底的に人間的な現象であり、人間は、ことばにおいて、考え、感じ、生きるものであり、それゆえ、ことばは人間存在のすべての層にわたって浸透している、というのがフンボルトの見解である。われわれは、フンボルトの語る行為を問うにあたり、このようなことばの人間的な基礎づけがどのような観点からなされているのか

語る行為と人間存在について

を、まず、ルソーおよびヘルダーに焦点をあわせて問うでしょう。というのも、かれらがなした、ことばの人間的な基礎づけは、また、フンボルトの「人間とことば」の問題、ひいては、ことばをめぐる「私」の問題の基本的構想となつているといえるからである。

ルソーによって提出された言語起源論の要点はつぎのようである。⁽²⁸⁾ルソーにしたがえば、ことばはその起源において歌うように生き生きと情熱のこもった調べをもっていたというのである。人間は他人に自分の感情や考えを伝えたいという欲求から、その手段を求めるが、その場合、感覚的に働きかける手段が原初的であるというのである。欲求が最初の身振りを示し、情念が最初の声をひきだしたというのである。ルソーの強調点は、人々はまずはじめに推理したのではなく、感じたということにある。つまり、最初のことばというのは、方法的で、推理をおこなう幾何学者のことばではなく、歌うように情念のこもった詩人のことば——それが発せられるのは、愛、憎しみ、憐れみ、怒りからである——であるというのである。したがって、ことばは、その根源において人間本性にもとづけられているのであって、そこからほとばしりでてくる情念にあふれた感性的な呼びかけと応答がことばの起源となっている、とルソーはいうのである。

ヘルダーもルソーと同様に情念の呼び声である音声にことばの始源を求めている。⁽²⁹⁾しかし、ヘルダーの主張は、情念のほとばしりである音声は言語の根に生氣を与える樹液といえるが、ルソーのようにそれがただちに言語であるとはいえないということにある。ことばは人間のもつあらゆる力の組織化された全体の中に、つまり、感じかつ認知し、認知しかつ意欲する人間がもつ、その素質全体のうちにその起源をもつというのである。ルソーのいう情念の強調は、人間を動物の盲目的で、本能的衝動へおとし入れることになるというのである。ヘルダーにとって、人間の

動物とことなつた特性は、人間が自由に活動する内省的意識 (Besonnenheit) をもつという点にあり、かれはことばの起源にこの内省的意識の働きを最重視する点でルソーと決定的にことなるのである。人間は自己のすべての感覚器官を通して流れ漂う感覚の大海原のただなかにあつて、あるものをほかのものから識別し、そのことを自ら承認できる内省の標識をもつのであり、それが魂のことばである、というのがヘルダーの見解である。それゆえ、ヘルダーはつぎのようにいう、「内省の最初の瞬間もまたことばの内面的な成立の瞬間なのである」⁽³⁰⁾、「人間の内面の内省的意識のあらゆる状態が言語的となり、人間の思想の鎖はことばの鎖となる」⁽³¹⁾というのである。このようにして、ヘルダーは、「人間は自由に思考し、行為する存在であつて、その力は漸進的に働きつづける。それゆえ、人間はことばの存在である」⁽³²⁾という命題を定立するのである。

以上のように、ルソーは感覚的、情念的なものに、また、ヘルダーは内省的意識にことばの起源を求めたのであつた。しかし、かれらは、いずれにしても、ことばを人間の本性から説明しようとしている。たとえば、ヘルダーのルソー批判―感覚的、情念的なものの強調にたいする批判―があるのであるが、しかし、人間は感覚的であるときさえも、人間的なのであつて動物とすでに区別されている、というのがルソーの真意なのである。つまり、ことばはあくまでも人間的事象のことであつて、動物との比較にたつて考察することは、また別な課題といえよう。

三・三 ことばを人間的事象として捉えるためには、人間存在が、感じ、考え、そして生きる、有機的存在であることを了解しておかなければならないであろう。このことをルソーおよびヘルダーにしたがつて表現するなら、人間は、感性的、情念的な存在であると同時にまた、内省的意識をもつた存在であるといえよう。フンボルトの立場はまさにこのうえに立っている。それでは、われわれはフンボルトのいう、「人間」に、とりわけ、語る主体としての「私」に

語る行為と人間存在について

焦点をあわせてみていくとしよう。

これまですでにのべてきたように、私の語りは、直接的であろうと間接的であろうと、汝との関係を除外してはな
りたえない。私は、汝との直接的な対話においては、汝と同様に感性的、情念的存在であり、また、内省的意識をも
った存在としてある。つまり、私は、ルソーのいうように、感性的、情念的存在であるゆえに、愛や悲しみなどの衝
動をもって、「汝」との関係をもつといえる。フンボルトは「私」を「最も根源的な感情 (das ursprüngliche Gefühl)⁽³²⁾
と呼ぶのであるが、これはルソーのいう、感性的、情念的なものを人間の本性の根幹として捉える立場をあらわすも
のである。私はこの根源的な感情を基底として汝と関係を結ぶ。フンボルトのいう人称語は、最も根源的な感情であ
る、「私」を基底としているといえる。レーヴィットは、フンボルトの「私—汝」を「私の汝 (Du eines Ich)」⁽³³⁾、つ
まり「自分の選んだ」汝「(ein „Du“ „der eigenen Wahl“) と呼ぶのであるが、フンボルトのいう、「私—汝」
は最も根源的な感情である、「私」からみた他者関係をあらわすものである。

この点をもっと論じるとしよう。フンボルトは場所の副詞と代名詞との類似性ならびに人称語と前置詞および間投
詞とのつながりを指摘しているのであるが、そのことを人称語が語るものとそれに応答するものとの空間的關係およ
び感情關係に起源をもつということから説明する。空間的關係に關していうなら、語るものとそれに応答するものとの
位置關係が問題となっていて、語るものは本来的に自分との距離の近いものを對話者として選んでいる。また、感
情關係についていうなら、フンボルトは生命感の発露としての間投詞にもっとナイーヴで生き生きとした、ことばの
出現をみるのであるが、その発露は語るものの直接的感情に由来しているのであって、語るものは自己の感情を伝え
るのにやはり自分との空間關係—位置の近さ、遠さ—によって他者のうちから汝を對話者として選んでいる。このよ

うない方は、もともと、こ・と・ばの始源に戻して想定されているのであって、想像とか、応答者の不在とかにおける、いわゆる内的な対話というものは、こうした直接的な対話とのアナロジーにおいて説明される。ここで問題となっていることは、語・る・も・のの感情とその空間的關係に人称語というものが起源をもつということであり、語・る・も・のはこのような關係にもとづいて汝を選択しているということである。この意味で、汝は「私の汝」であるといわれるのである。ところで、私なり、汝なりの人称語というのは誰れにでも適用されるものである。つまり、語・る・も・のとそれに応答するものとの位置關係によつて、各人は私とも汝ともなりうるのである。この点を強調するなら、人称語は対話における形式的な役割關係というものを指示しているのであって、それゆえ、各人はかれが演ずる役割によつて、私、汝、かれといった人称語——レーヴィットの表現すれば、⁽³⁵⁾役割的人称語とも名づけられようが、わたしはそれを仮面（ペルソナ）と名づける——で呼ばれる可能性をもっているといえよう、しかし、各人がどの仮面をつけようとも——つまり、どの人称語で呼ばれようとも——、各人は仮面のうしろに自分の顔をもっている。それこそ個人にのみ属する素顔といえる。いいかえるなら、個人がある対話において、その役割關係に應じてどの人称語で呼ばれたとしても、当の本人は、自分を結局のところ「私」として了解するのである。この「私」は、仮面における「私」ではない、仮面をつける「私」である。それをペルゾンとしての「私」と呼ぶとしよう。このペルゾンとしての「私」を基底として、各人は仮面をつけ、舞台で各自に与えられた役割を演じているといえる。

このように「私」を捉えるとき、「私」は、もはや文法形式における人称代名詞の「私」にとどまるものではない。「語る主体」としての「私」が問題となつているといえる。フンボルトは、「代名詞の基底は私 (Ichheit) である。私は最も根源的な感情である」⁽³⁶⁾というのであるが、ここで、「私」が「私であること」がまさに問題となつている。

語る行為と人間存在について

た歴史内存在におかれざるをえないということである。しかし、この問題をどのように解すべきであらうか。ここで、ことばの社会性が問題とされなければならないであろう。

フンボルトはことばの社会性にふれ、言語を国民または民族の精神とか世界観としてうけとる。その詳細は省くとして、フンボルトが言語を民族の精神なり、世界観としてうけとるのは、つまるところ、言語には、その言語を共有する各個人の協働による、各個人の精神および世界観が表現されているとうけとるからである。フンボルトは社会性を言語生成の不可欠な補助手段とみなすが、ことばは究局的に個人のうちに生成の基盤をもつと主張する。フンボルトは、あくまでも、ことばをエルゴンとして捉えず、エネルギアとして捉えるゆえに、ことばの産出のされ方に力点をおくのである。したがって、フンボルトにとって、われわれが歴史内存在として、ある特定の言語の制約下にあるのであり、その言語をわれわれがいかにして修得しているのかという問題は第二義的なのである。フンボルトは、「ことばは修得されるのではなく、根源的に人間のうちに存していなければならない」⁽³⁸⁾、「人間の本性のうちに能力としての一般的交互作用ともうひとつの完全な統一性がある」⁽³⁹⁾という。これらの表現から、われわれはフンボルトがことばを既成の言語体系においてみるのではなく、人間の本性のうちにみているのである。人間の本性には能力として交互作用と統一性というものがあり、それが個人と個人との相互関係および個人間の共同関係を形成するのであり、これらの関係においてことばがあらわれてくるというのである。このことは、これまでみてきたように、私と汝との対話である語る行為から説明されている。つまり、有機的生命体としての「私と汝」との対話を基軸として、自己の内面を開き、自己の精神的全素質を展開することによって、全体として人類性という人間本性を自己のうちにみだし、また、そのことを通して、各人はひとつの共同体を形成していくのである。

われわれは、たしかに、既成の言語体系に投げやられていて、その言語に何かと規制されている。しかし、もっと根源的なものは人間の本性に深く根差している。われわれが何かを語ろうとするなら、われわれは語り全体とのかかわりなしには語りえないのである。そのことは、ひとつの全体としてのことばを語りうる可能性が人間の本性にあることを意味する。フンボルトはこうした可能性から、ことばを説明しようとしているのである。その意味で、フンボルトはことばを語る行為にもとづけて考察しようとしているのである。したがって、フンボルトにとって、ことばへの探究は人間存在の根源的な在り方への探究を意味するのである。

註

フンボルトからの引用にさいして、慣用にしたがって、ライツマン編集によるアカデミー版の巻数および頁数をつけた。テキストとして、主としてつぎのものを使用した。

Wilhelm von Humboldt, Werke I-IV. (hrsg. von Andreas Flitner und Klaus Giel), 1960-1964.

- (1) Karl Löwith, Das Individuum in der Rolle des Menschen, 1928, S. 103-105 (以下 Das Individuum 以下参照)。
- (2) Karl Jaspers, Von der Wahrheit, 1947, S. 396.
- (3) W. v. Humboldt, Über die Verschiedenheiten des menschlichen Sprachbaues, VI, 161. (以下巻数および頁数のみ)。
- (4) W. v. Humboldt, Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts, VII, 166.

北大文学部紀要

(5) W. v. Humboldt, VI, 160.

(6) W. v. Humboldt, VII, 57.

(7) 拙稿「ベースからミートへ」北大文学部紀要十七の二、五
六—六〇ページ参照。

(8) W. v. Humboldt, VI, 152-156.

(9) Eva Fiesel, Die Sprachphilosophie der deutschen Romantik, 1927.

(10) “Innere Sprachform” について W. v. Humboldt, VII, 86-97. “Lautform der Sprache” について W. v. Humboldt, VII, 81-86.

(11) Martin Buber, Ich und Du, 1966 (hrsg. von Lambert Schneider), S. 9.

(12) W. v. Humboldt, VI, 161.

(13) W. v. Humboldt, VII, 161.

- (14) W. v. Humboldt, Über den Dualis
- (15) Ernst Cassirer, Philosophie der symbolischen Formen, 1923, Erster Teil, S. 202.
- (16) Ernst Cassirer, derselbe, S. 201.
- (17) W. v. Humboldt, VII, 104.
- (18) Ernst Cassirer, derselbe, S. 204-205.
- (19) Karl Löwith, Das Individuum, S. 11.
- (20) W. v. Humboldt, VII, 46.
- (21) W. v. Humboldt, Über das vergleichende Sprachstudium, IV, 46.
- (22) J. W. v. Goethe, Italienische Reise (相良中雄訳岩波文庫
ト三ノ一三六ノ一)
- (23) W. v. Humboldt, VI, 12.
- (24) W. v. Humboldt, IV, 16.
- (25) W. v. Humboldt, VII, 45.
- (26) W. v. Humboldt, VII, 166.
- (27) W. v. Humboldt, VII, 44.
- (28) Jean-Jacque Rousseau, Essai sur l'origine des langues ou il est parlé de la méthode et de l'imitation musicale, 1966.
(小林章彦訳『言語起源論』現代思潮社)
- (29) J. G. Herder, Abhandlung über den Ursprung der Sprache, 1966 (Reclam.)
- (30) J. G. Herder, derselbe, S. 32.
- (31) J. G. Herder, derselbe, S. 85.
- (32) J. G. Herder, derselbe, S. 80.
- (33) W. v. Humboldt, VI, 164, 307.
- (34) Karl Löwith, Das Individuum, S. 127.
- (35) Karl Löwith, Das Individuum, S. XIV.
- (36) W. v. Humboldt, VI, 307.
- (37) W. v. Humboldt, VII, 53.
- (38) W. v. Humboldt, VII, 58.
- (39) W. v. Humboldt, Theorie der Bildung des Menschen, I, 285.